

“花籠”、“はな・かご”と{サクラガ}{サク}考

動態測定による日本語アクセントの研究(その2)

杉 藤 美 代 子

0. は じ め に
…… “アクセント素”の問題
1. “花かご”と“花・かご”(低高低低)
…… 後者の〔カ〕の強さが特徴か
2. コレガ(低高高)
…… 〔コ〕が一番強いのか
3. 京阪方言、“底の”(高高高)と“其処の”(低低高)
…… “前者のソコは高く弱く、後者のソコは低く強い”か
4. 京都方言、“桜が咲く”(高高高高高)
…… {サクラガ}{サク}二つのアクセント素としての“強さや調音上の特徴”があるか
5. む す び
一語としてのまとまりが一定の物理量としてあらわれるとは思われない

0. はじめに

0.1……“アクセント素”の問題

服部四郎氏は「言語学の方法」の中で、アクセントに関し、次の点を強調される。

“日本語一般に、アクセント素の頭の部分すなわち第1モーラの部分がやや強く発音されかつはっきり調音される傾向がある。この特徴はアクセント素の力によるものと解釈される……”¹⁾

また、実例としてあげられたものの中には次のようなものがある。

1) “「花かご」という合成語は〔低・高・低・低〕で「花・かご」という単語連続は〔低・高・低・高〕であるが、むぞうさに発音すると両者ともに〔低高低低〕となる。しかし、〔カ〕は後の方がやや強く、前者は〔ハナカゴ〕全体が一つにまとまろうとするに対し、後者は〔ハナ〕〔カゴ〕おのおのがまとまろうとする。このように、(日本語の)アクセントには音節連続(あるいは単独の音節)を一つにまとめ、第1モーラの部分の発音をやや強めにする力がある”²⁾

2) “東京方言のコレガ(之が)は「低高高」であるけれども第1音節が一番強いという特徴があり、その特徴は「高低アクセント素」においては、その頭が強いとして記述される。”³⁾

3) “京阪の方言……〔ソコフ〕(底の)の〔ソコ〕は高くやや弱く発音され、弁別的低のそれ(前述の〔ソコフ〕(その)の〔ソコ])は低くやや強い。これは、高低の対立を対等に保つためである。高と強、低と弱が結びつくと、「高」のきこえが「低」のそれより著しく良くなり均衡が破れる。核より後の低が弱く発音されるのは、ここには高低の音韻的対立がないからで、この点よりみても「核」という名称はふさわしい”⁴⁾

4) “亀山方言(京都も同様のようだ)のサクラガサク(桜が咲く)は「高高高高高」だから、高さの点(殊に調素)にばかり注意していると途中に何の切れ目もないが、強さや調音上の特徴に注意すると{「サクラガ」}{「サク」}のように二つのアクセント素を有すると認められる。”⁵⁾

氏が、“日本語のアクセントの型を、調素に「バラシてしま」わなないで全体的特徴に目を向けようとする姿勢には学ぶべきものが多い。ただ、上にあげた例の、その問題になる箇所を見ると、みな無声子音の先行する拍であり、語例がいずれも一つに止まるのが気になる。

(1) [hanakago] と [hana・kago]

(2) [korega]

(3) [sokono] と [sokono]

(4) [sakuragasaku]

そこで語例をいずれも相当数そろえて、果たして、

- (1) の場合〔hanakago〕と〔hana・kago〕の弁別的特徴が〔ka〕の強きにあるのか
- (2) 〔koreŋa〕の場合には、いわゆるプロミネンスでなく、東京平板3拍語の“頭が強い”のか。
- (3) 〔sokono〕→〔soko〕高くやや弱い
〔sokono〕→〔soko〕低くやや強い
- 以上が事実か。又大阪3拍語の平板アクセントと尾高アクセントの場合上記のような対立があるか。
- (4) 〔sakuragasaku〕と発話した場合、意味上の区切り{sakuraga}{saku}が、“強さや調音上の特徴”として物理量的にあらわれるか。またこの発話のように〔a〕の多い例、〔arigatasu〕等一語の場合、この〔sa〕もやはり“強さや調音上の特徴”があるのではないか。又は〔sakuragatjiru〕等々他のことばの場合はどうか。

以上の点で実験資料をつくった。この稿においては、単語アクセントの問題と意味上の区切りの問題を述べる。

結論としては、(1)は第1章に述べるように“強さ”というより音調動態の問題であり、(2)(3)(4)も必ずしも強さの問題として解決されるとは思われない。

インフォーマントについて。東京のそれは、A、B、Cの3氏、それぞれ世田谷、大森、府中市出身の銀行員と技術者、及びT氏、板橋の技術者及びN氏 Ts氏 銀行員、神田と根岸の出身、いずれも30才台である。

大阪A氏Y氏は、それぞれ大阪船場及び本町出身、30才台、船場老舗の主人とともに呉服商とである。

京都の女性DさんCさんは20才台。いずれも生粋の人々をえらんだ。

1. “花かご”と“花・かご”

1.1……後者の〔カ〕の強さが特徴か

“花かご”という合成語と、“花・かご”という単語連続は、むぞうさな発音では、一応ともに“低高低低”のようである。しかし、服部氏の述べられるごとく“花かご”は全体がまとまろうとするのに対し、“花・かご”では二つの語おのおのがまとまろうとするその相違点は〔カ〕が後者のほうがやや強い”ということにはならない。

筆者は、〔hanakago〕の外に次の語をえらび東京出身者A氏B氏C氏に、次々とむぞうさに発話してもらった。順序は下記の通りである。

“花かご、花・籠、花嫁、花・嫁、色紙、色・紙、山川、山・川、花道、花・道、ひと枝、人・枝、伯父上、伯父・上”（但し花籠だけは3人とも二高アクセントでなく、注文してA氏B氏には言い直してもらった。A氏のは“花かご”がやや〔は「なか」ご〕に近く聞こえる。B氏のは“花・かご”がやや〔は「なかご」に近く聞こえる。C氏のは、二拍語に〔低高高低〕が多いので省く。)

これらのスペクトログラムを、図1.1～図1.7に示す。ピッチ曲線

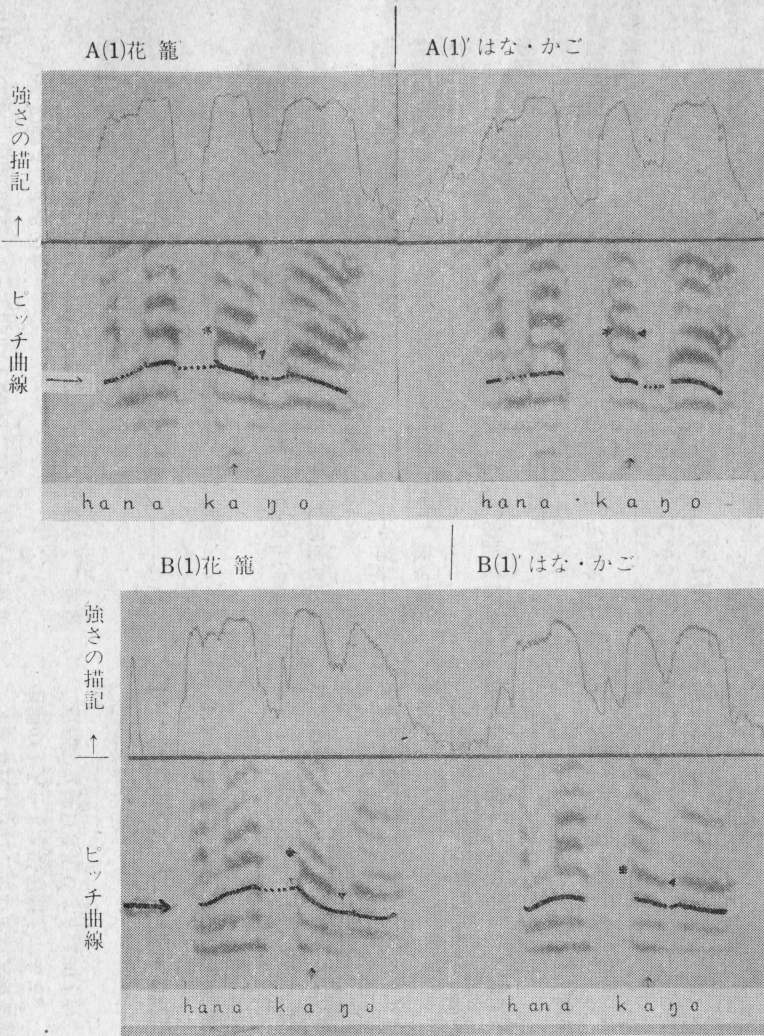


図1.1(1) “花籠”と“はな・かご”、上A氏、下B氏（以下同様）

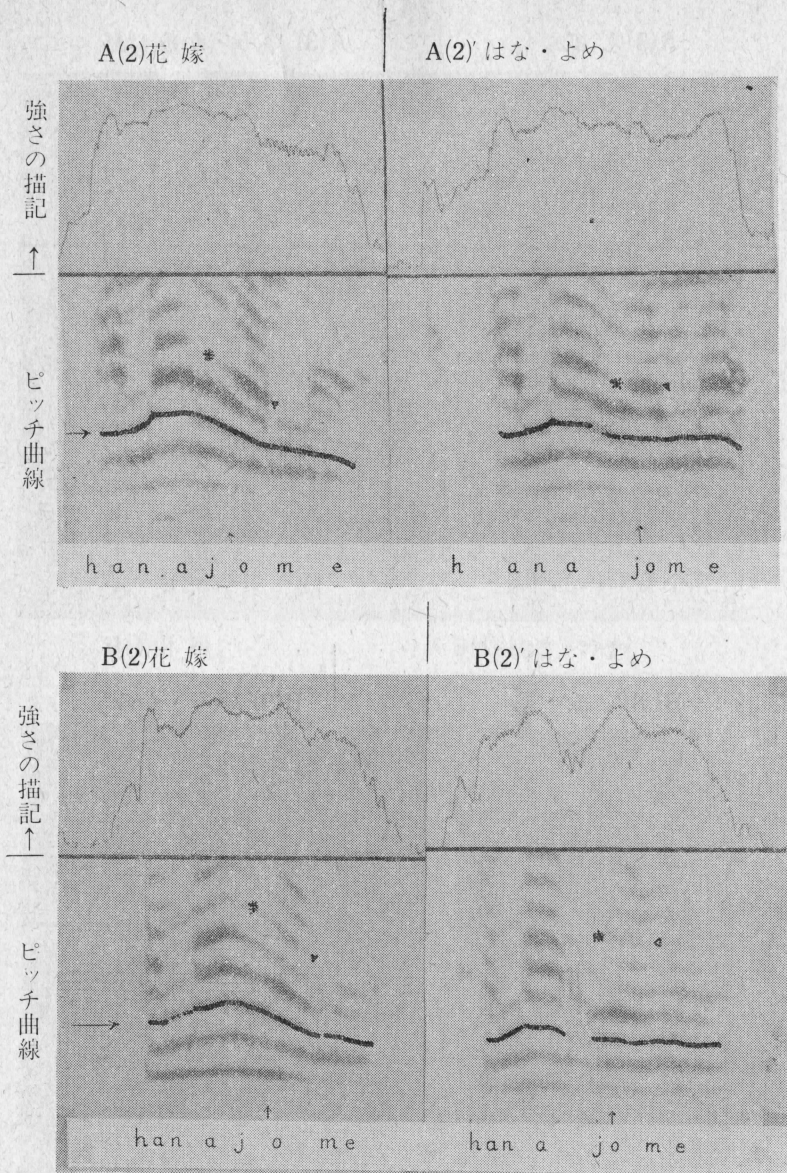


図1.2 “花嫁”と“はな・よめ”

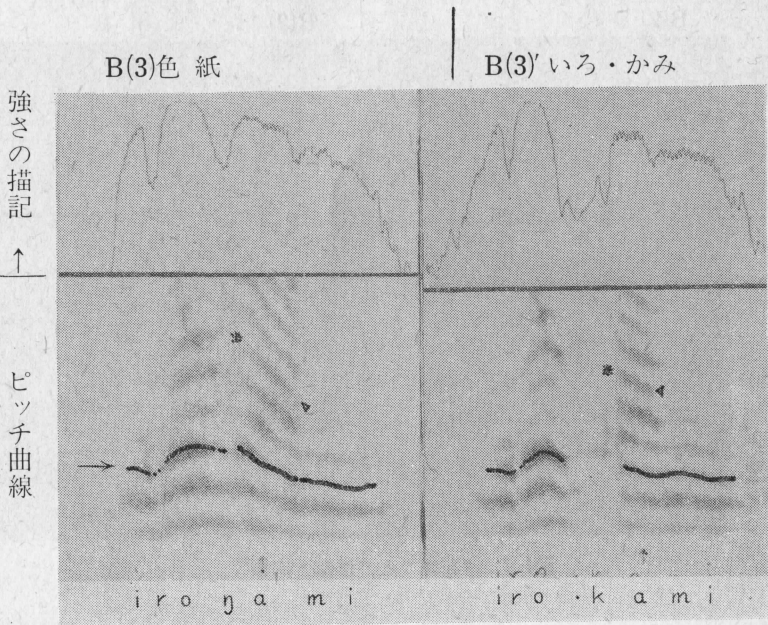
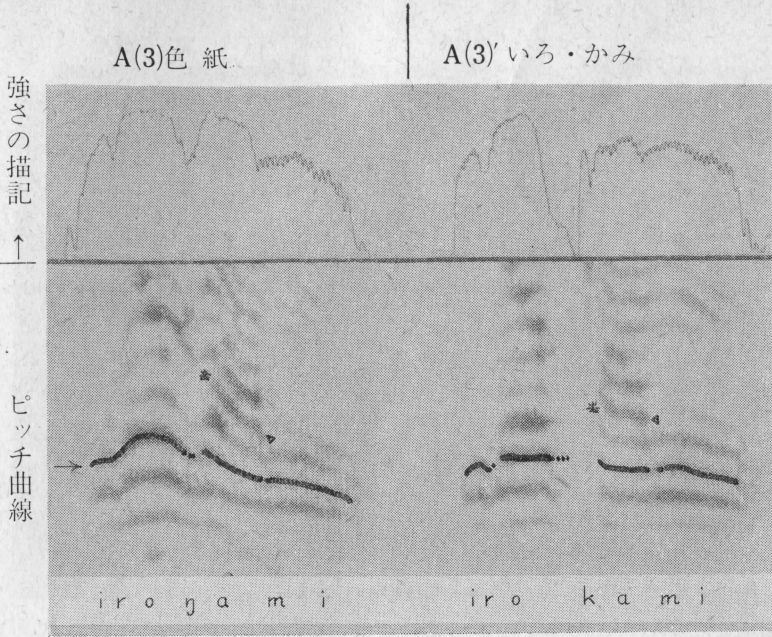


図1.3 “色紙”と“いろ・かみ”

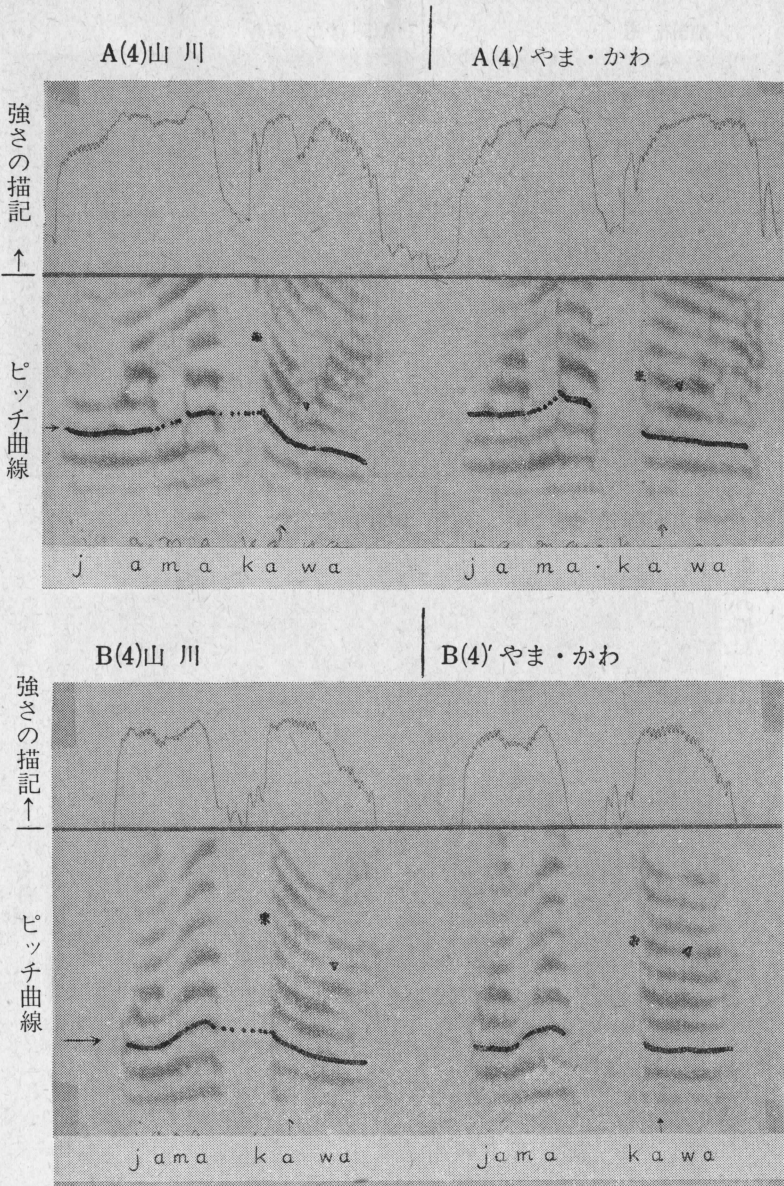


図1.4 “山川”と“やま・かわ”

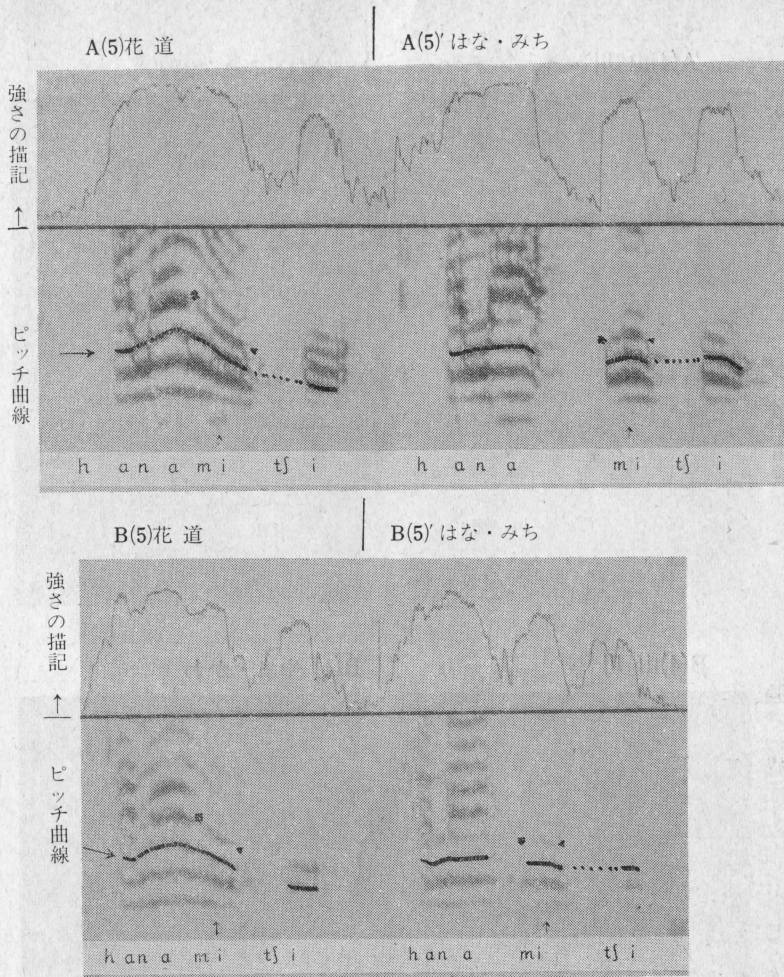


図1.5 “花道”と“はな・みち”

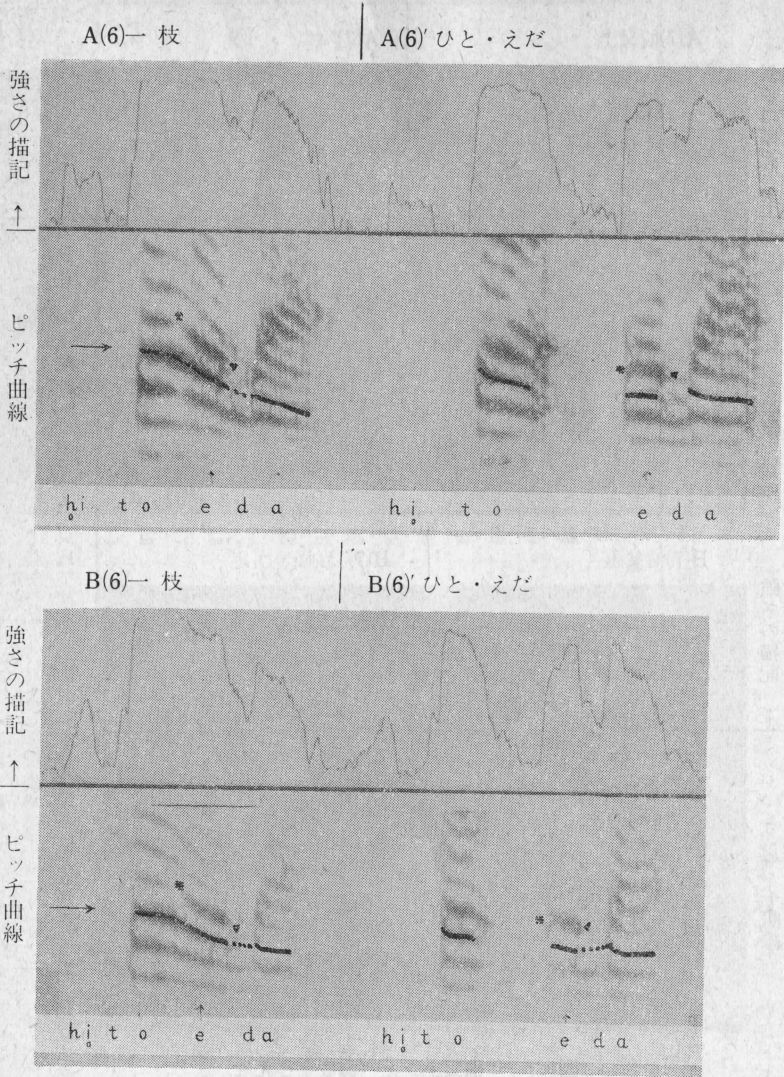


図1.6 “ひと枝”と“ひと・枝”

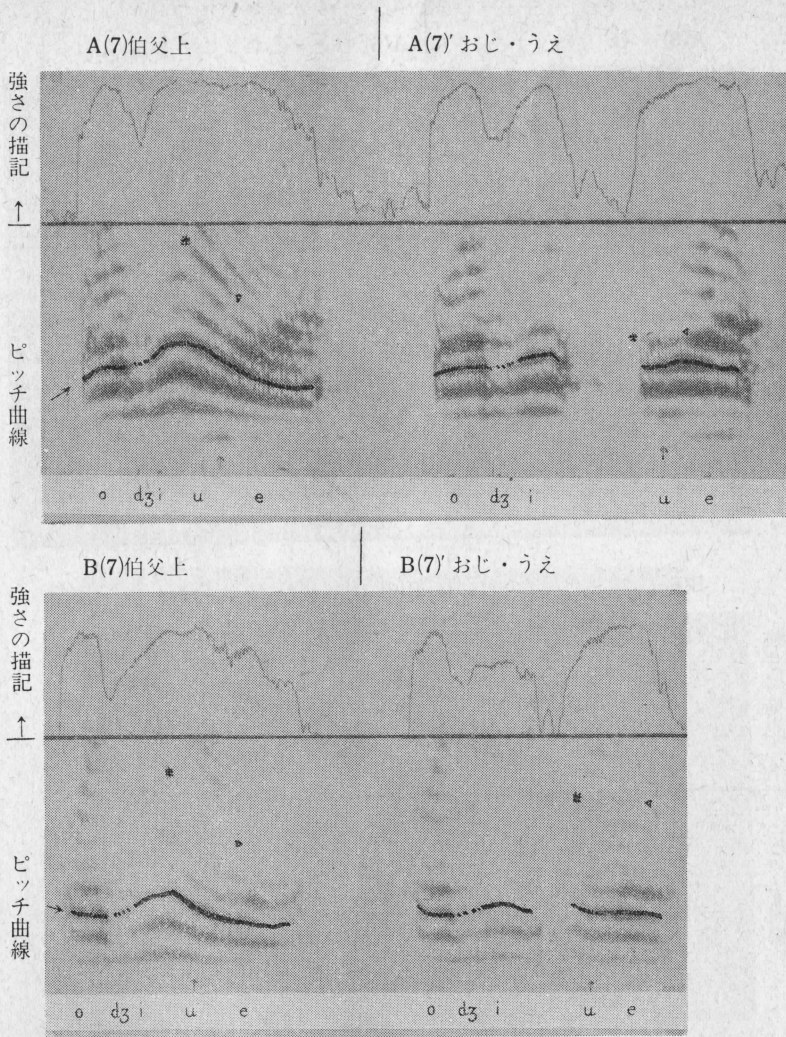


図1.7 “伯父上”と“おじ・うえ”

を実線で示した。上半分は強さの描記である。この強さの描記を下から測定した数値を表1.1に示す。“強さ”には、面積を見る考え

表1.1. 4拍語と2拍語連続の場合のa.振幅とd.持続時間

	(I) 4 拍 語				(II) 2 拍 語 連 続			
	①	②	③	④	①	②	①	②
はなかご	a. 35	41	41	41	35	41	39	39
	d.(4	9	12	20)	(5	9	9	16)
はなよめ	a. 40	43	40	33	40	42	38	40
	d.(6	9	15	12)	(5	13	9	10)
いろがみ	a. 30	35	35	25	25	34	28	27
	d.(7	14	14	15)	(6	12	12	17)
やまかわ	a. 40	42	40	40	40	43	38	40
	d.(10	8	10	12)	(10	9	10	14)
はなみち	a. 38	43	41	33	39	43	38	35
	d.(5	11	11	13)	(5	15	14	12)
ひとえだ	a. 16	41	41	38	9	41	38	39
	d.(0	10	13	15)	(0	20	11	17)
おじうえ	a. 39	40	41	39	39	38	36	41
	d.(13	10	14	17)	(15	14	13	17)

方もある⁶⁾から、念のため母音の持続時間をそえた。(但し持続時間は見にくいからペンオシロによる記録を参照した。)細字がそれである。表1の4拍語第3拍と、2拍語連続の後の第1拍の、強

さの描記(又は持続時間を参照して見ても、4拍語第3拍に比べて2拍語連続の後の第1拍がとくに“強い”とは思われない。

一方ピッチ曲線の方は(図1.1~図1.7)いずれも次の特徴を示す。即ち、4拍語「花かご」の類はすべてその第3拍が下降音調動態を示し、2拍語連続の「花・かご」の類はすべて平ら音調に近い。それを見易くするためにピッチ曲線のその部分の見易い任意の所に*印と<印をつけて示した。(*印から<印へと辿っていただきたい。)

更にこれらをペンオシロで波形に変え、母音(又は有聲母音)を構成する各波の波長を測って出した cycle per second の数値を表1.2に示す。但しこの表では、隔波ごとの数値をのせ、その値が第3拍、(又は二拍語連続の場合は後の第1拍)の母音のはじめのピッチを1とした場合の比の値を出したのが、r.の項である。この項の太字の部分、第3、4拍(又は二拍語連続の場合は後の第1、2拍)の終りの値は、“花かご”4拍語(1)では0.77*、(1)'の方はあまり下降せず0.92*、終りの拍では前者0.68*、(1)'の終りは0.80*である。同じマークの数値を比べていただきたい。数値の小さい方が下降を示す。(紙面の都合で(6)は省いた。)(7)' hana・mitji の後の第1、2拍は上昇である。

即ち、2拍語連続の場合は〔低高低低〕であるが、4拍語の場合は〔低高〇低〕その〇の部分、傾斜であり、これがむぞうさな発音の実態である。

4拍語二高アクセントの場合、第3拍の下降の実態を示すため表

表 1.2 “花籠”と“はな・かご”……4拍語(二高アクセント)単語と、2拍語連続の場合の音調動態(%の項は隔波ごとのピッチ、r.の項は矢印の示すピッチを1.00とした場合の比の値、例えば0.77と0.92、0.68と0.80とを比べて見る。)(A氏)

	第 1 拍	第 2 拍	第 3 拍 (2拍語連続の場合には第1拍)	第 4 拍 (2拍語連続の場合には第2拍)
(1) ha na ka go	c _s ↑ 137 ↑ r. 1.00	(143 155 155) 162 167 167 167 167 167 143 155 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.08 1.08 1.00 1.03 1.03 1.03 1.03 0.88 0.96	167 155 147 143 128 ↑ ↑ ↑ 1.00 0.93, 0.88 0.86 0.77*	(120 125) 125 125 122 119 114 114 ↑ ↑ ↑ 0.72 0.75 0.75 0.75 0.73 0.71 0.68 0.68*
(1)' hana kago	c _s ↑ 167 143 ↑ r. 1.00 0.86	(141 143 147) 152 152 155 155 149 ↑ ↑ ↑ 1.00 1.01 1.04 1.00 1.00 1.00 1.02 0.98	155 149 143 143 ↑ ↑ ↑ 1.00 0.96 0.92 0.92*	(135 133 133) 135 133 133 125 128 124 ↑ ↑ ↑ 0.87 0.86 0.86 0.87 0.86 0.86 0.81 0.83 0.80*
(2) ha na jo me	c _s ↑ 143 ↑ r. 1.00	(143 147 152) 160 167 167 167 176 170 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.03 1.06 1.00 1.04 1.04 1.04 1.10 1.06	(182 179 176) 182 170 167 167 167 162 157 147 143 135 133 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 0.98 0.97 1.00 0.93 0.92 0.92 0.92 0.89 0.86 0.81 0.79 0.74 0.73*	(125 111 125) 118 119 118 ↑ ↑ ↑ 0.69 0.61 0.69 0.65 0.65 0.65 0.63*
(2)' hana jome	c _s ↑ 135 125 ↑ r. 1.00 0.93	(137 139 143 157) 157 155 155 155 147 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.01 1.04 1.15 1.00 0.99 0.99 0.99 0.94	(135 135 125) 131 131 131 130 128 128 125 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 0.93 1.00 1.00 1.00 0.99 0.98 0.98 0.95*	(125 133 130 128 125 125 124 124 125) 143 111 125 133 ↑ ↑ ↑ ↑ 0.95 1.02 0.99 0.98 0.95 0.95 0.95 0.95 0.95 1.09 0.85 0.95 1.02*
(3) i ro ga mi	c _s ↑ 143 145 143 143 ↑ r. 1.00 1.01 1.00 1.00	(141) 147 167 167 167 172 179 179 172 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 1.14 1.14 1.14 1.14 1.17 1.22 1.22 1.17	(172 179) 167 176 172 167 155 147 143 143 125 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.04 1.00 1.05 1.03 1.00 0.93 0.88 0.86 0.86 0.73*	(125 125 125) 119 119 118 125 ↑ ↑ ↑ 0.75 0.75 0.75 0.71 0.71 0.71 0.75*
(3)' iro gami	c _s ↑ 143 139 133 135 143 ↑ r. 1.00 0.97 0.93 0.94 1.00	(128 143) 143 167 167 167 160 162 162 172 167 167 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.12 1.00 1.17 1.17 1.17 1.12 1.13 1.13 1.20 1.17 1.17	143 143 141 139 128 ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 0.99 0.97 0.90*	(133 133 133 125 125) 125 124 124 133 ↑ ↑ ↑ 0.93 0.93 0.93 0.87 0.87 0.87 0.87 0.87 0.87 0.87 0.83*
(4) ja ma ka wa	c _s ↑ 143 141 143 143 137 ↑ r. 1.00 1.00 1.01 1.01 0.97	(143 155) 167 167 172 172 172 167 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.08 1.00 1.00 1.03 1.03 1.03 1.00	155 143 133 128 125 120 ↑ ↑ ↑ 1.00 0.92 0.86 0.83 0.81 0.77*	(120 119) 115 116 116 ↑ ↑ ↑ 0.77 0.77 0.74 0.75 0.75*
(4)' jama kawa	c _s ↑ 139 133 131 133 135 ↑ r. 1.00 0.96 1.00 1.02 0.99	(139 149 167) 155 162 167 167 147 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.07 1.20 1.00 1.05 1.08 1.08 1.08 0.95	137 133 ↑ ↑ 1.00 0.87*	(125 125 125) 127 125 125 127 133 ↑ ↑ ↑ 0.91 0.91 0.91 0.93 0.91 0.91 0.93 0.87*
(5) o dzi u e	c _s ↑ 143 137 131 143 135 ↑ r. 1.00 0.96 0.92 1.00 0.94	(149 149 147 152) 162 167 167 179 179 172 176 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 0.99 1.02 1.00 1.03 1.10 1.10 1.06 1.09	179 170 167 155 155 143 139 135 127 ↑ ↑ ↑ 1.00 0.95 0.93 0.87 0.87 0.80 0.78 0.75 0.71	125 125 122 119 118 118 118 125 139 ↑ ↑ ↑ 0.70 0.70 0.68 0.66 0.66 0.66 0.66 0.70 0.78
(5)' odzi ue	c _s ↑ 147 143 133 139 139 ↑ r. 1.00 0.97 0.90 0.95 0.95	(137 143 143 143) 143 152 157 157 157 147 139 133 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.04 1.04 1.04 1.00 1.06 1.10 1.10 1.10 1.03 0.97 0.93	155 149 141 139 135 135 ↑ ↑ ↑ 1.00 0.96 0.91 0.90 0.87 0.87	137 130 133 128 133 125 125 ↑ ↑ ↑ 0.88 0.84 0.86 0.83 0.86 0.81 0.81
(7) ha na mi fji	c _s ↑ 162 147 143 ↑ r. 1.00 0.91 0.88	(162) 172 167 167 170 170 182 182 176 176 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 0.97 0.97 0.99 1.06 1.06 1.02 0.97	(167 167 160 143) 145 143 139 122 ↑ ↑ ↑ 1.00 1.00 0.96 0.86 1.00 0.99 0.96 0.84	130 125 125 122 ↑ ↑ ↑ 0.90 0.86 0.86 0.84
(7)' hana mi fji	c _s ↑ 135 122 ↑ r. 1.00 0.90	(128 135 147) 143 143 143 143 141 141 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.05 1.15 1.00 1.00 1.00 1.00 0.99 0.96	(118 128 125 133 125 125) 120 155 125 125 ↑ ↑ ↑ ↑ 1.00 1.08 1.06 1.13 1.06 1.06 1.00 1.29 1.04 1.04	122 122 ↑ ↑ 1.02 1.02

表 1.3 4 拍語二高アクセント単語の音調動態 (%の項は隔波ごとのピッチ、r. の項は矢印の示すピッチを1.00とした場合の比の値)

		第 1 拍	第 2 拍	第 3 拍	第 4 拍
(1) a ki N do	%	103 119 124 ↑ ↑	167 170 170 170 165 165 160 160 162 155 152 ↑ ↑	143 141 133 129 122 ↑ ↑	111 105 104 90 ↑ ↑
	r.	1.00 1.16 1.20	1.00 1.02 1.02 1.02 0.99 0.99 0.96 0.96 0.97 0.93 0.91	1.00 0.99 0.93 0.90 0.85	0.78 0.73 0.73 0.63
(2) i ke ba na	%	119 122 ↑ ↑	176 176 182 182 182 ↑ ↑	(176 162 160) 165 155 160 162 143 141 137 130 ↑ ↑	(125 118 128) 112 114 108 98 71 ↑ ↑
	r.	1.00 1.03	1.00 1.00 1.03 1.03 1.03	1.00 0.92 0.91 1.00 0.94 0.97 0.98 0.87 0.85 0.83 0.79	0.76 0.72 0.78 0.68 0.69 0.65 0.59 0.43
(3) za bu to N	%	125 130 133 143 145 ↑ ↑	(155 160) 157 160 162 ↑ ↑	143 128 122 ↑ ↑	112 101 99 ↑ ↑
	r.	1.00 1.04 1.06 1.14 1.16	1.00 1.03 1.00 1.02 1.03	1.00 0.90 0.85	0.78 0.79 0.69
(4) i ro ga mi	%	137 141 145 ↑ ↑	(143 165) 167 162 165 170 170 170 167 ↑ ↑	(165 165 157 155 149) 143 141 130 127 122 ↑ ↑	(102 116 112) 111 104 98 70 ↑ ↑
	r.	1.00 1.03 1.06	1.00 1.15 1.00 0.97 0.99 1.02 1.02 1.02 1.00	1.00 1.00 0.95 0.94 0.90 1.00 0.99 0.91 0.89 0.85	0.71 0.81 0.78 0.78 0.73 0.69 0.49
(5) ko to bu ki	%		170 170 167 167 167 165 162 ↑ ↑	(141 133) 139 135 131 124 112 ↑ ↑	0 (無声化)
	r.		1.00 1.00 0.98 0.98 0.98 0.91 0.97	1.00 0.94 1.00 0.97 0.94 0.89 1.81	
(6) so ra ma me	%	139 114 ↑ ↑	(127 165) 162 162 165 165 167 167 ↑ ↑	(170 172 170 167 162) 160 143 143 135 133 ↑ ↑	(115 125 118 115 125) 111 102 92 ↑ ↑
	r.	1.00 0.82	1.00 1.30 1.00 1.00 1.02 1.02 1.03 1.03	1.00 1.01 1.00 0.98 0.95 1.00 0.89 0.89 0.84 0.83	0.72 0.78 0.74 0.72 0.78 0.69 0.64 0.58
(7) ta t fi ba na	%	124 130 ↑ ↑	176 167 ↑ ↑	(170 165 160) 176 165 162 147 143 135 131 125 ↑ ↑	(112 118 114) 115 108 99 75 ↑ ↑
	r.	1.00 1.05	1.00 0.95	1.00 0.97 0.94 1.00 0.94 0.92 0.84 0.81 0.77 0.74 0.71	0.64 0.67 0.65 0.65 0.61 0.56 0.43
(8) su zu ra N	%	130 139 139 147 ↑ ↑	(155 149) 155 160 167 170 172 176 170 157 ↑ ↑	(143 165) 165 147 141 137 125 125 115 ↑ ↑	(109 91) ↑ ↑
	r.	1.00 1.07 1.07 1.13	1.00 0.96 1.00 1.03 1.08 1.10 1.11 1.14 1.10 1.01	1.00 1.15 1.00 0.89 0.85 0.83 0.76 0.76 0.70	0.66 0.55
(9) jo mi mo no	%	141 141 124 ↑ ↑	(139 165) 157 162 167 167 172 176 ↑ ↑	(179 182 179 179 182 182) 196 167 165 165 162 147 ↑ ↑	(155 141) 135 130 112 108 105 ↑ ↑
	r.	1.00 1.00 0.88	1.00 1.19 1.00 1.03 1.06 1.06 1.06 1.10 1.12	1.00 1.02 1.00 1.00 0.98 0.98 1.00 0.85 0.84 0.84 0.83 0.75	0.79 0.72 0.69 0.66 0.57 0.55 0.54
00 ta te mo no	%	125 127 ↑ ↑	185 185 ↑ ↑	(189 182 175 170 167 167 165) 167 160 147 145 ↑ ↑	(141 131 130) 128 118 102 79 ↑ ↑
	r.	1.00 1.02	1.00 1.00	1.00 0.96 0.93 0.90 0.88 0.88 0.87 0.88 0.85 0.78 0.77	0.84 0.78 0.78 0.77 0.71 0.61 0.47

表 1.4 4 拍語平板アクセント単語の音調動態 (%の項は隔波ごとのピッチ、r. の項は、矢印の示すピッチを1.00とした場合の比の値)

	第 1 拍	第 2 拍	第 3 拍	第 4 拍
(1) a i ma i	% ↑ 118 135 135 149 152 155 ↑ r. 1.00 1.14 1.14 1.26 1.29 1.31	160 160 165 165 ↑ 1.00 1.00 1.03 1.03	(167 182 167 170 170 167 167) 165 162 160 160 157 155 147 145 ↑ 1.00 1.09 1.00 1.02 1.02 0.99 0.99 1.00 0.98 0.97 0.97 0.95 0.94 0.89 0.88	135 137 127 124
(2) i za jo i	% ↑ 127 133 133 133 ↑ r. 1.00 1.05 1.05 1.05	(133 133) 155 170 170 167 167 165 167 167 162 165 165 ↑ 1.00 1.00 1.00 1.10 1.10 1.08 1.08 1.06 1.08 1.08 1.05 1.06 1.06	(165 162) 162 162 160 155 155 149 145 143 143 ↑ 1.00 0.98 1.00 1.00 0.99 0.96 0.96 0.92 0.90 0.88 0.88	141 139 139 130 125 0.87 0.86 0.86 0.80 0.77
(8) i ta da ki	% ↑ 125 128 ↑ r. 1.00 1.02	157 165 162 162 160 ↑ 1.00 1.05 1.03 1.03 1.02	(147 157) 157 157 152 147 145 147 145 ↑ 1.00 1.07 1.00 1.00 0.97 0.94 0.92 0.94 0.92	141 141 139 139 130 125 0.90 0.90 0.89 0.89 0.83 0.80
(4) o o ja ke	% ↑ 125 137 143 145 147 152 160 165 ↑ r. 1.00 1.10 1.14 1.16 1.18 1.22 1.28 1.32	162 162 162 165 165 162 ↑ 1.00 1.00 1.00 1.02 1.02 1.00	(162 162 155) 145 147 147 ↑ 1.00 1.00 1.24 1.00 1.01 1.01	141 143 139 139 141 135 128 125 0.97 0.99 0.96 0.96 0.97 0.93 0.88 0.86
(5) ga ma gu tji	% ↑ 131 133 137 ↑ r. 1.00 1.02 1.05	(137 147 165 155) 160 160 162 165 165 165 165 ↑ 1.00 1.07 1.20 1.13 1.00 1.00 1.01 1.03 1.03 1.03 1.03	(162 165 162 152) 152 152 149 143 141 ↑ 1.00 1.02 1.00 0.94 1.00 1.00 0.98 0.94 0.83	143 133 139 143 137 131 122 0.94 0.88 0.91 0.94 0.90 0.86 0.85
(8) ka m ba N	% ↑ 162 162 162 160 160 ↑ r. 1.00 1.00 1.00 0.99 0.99	(162 162 170 170 167 167 162) ↑ 1.00 1.00 1.05 1.05 1.03 1.03 1.00	(162 155 143 143 149) 165 165 165 162 157 149 147 145 143 141 139 ↑ 1.00 1.96 0.88 0.88 0.92 1.00 1.00 0.98 0.95 0.90 0.89 0.88 0.87 0.85 0.84	(139 137 137 137 127) 0.84 0.83 0.83 0.83 0.77
(7) za i mo ku	% ↑ 143 139 139 141 143 147 ↑ r. 1.00 0.97 0.97 0.99 1.00 1.03	155 155 155 147 ↑ 1.00 1.00 1.00 0.95	(155 160 162 162 162 157) 152 152 141 133 ↑ 1.00 1.03 1.05 1.05 1.05 1.01 1.00 1.00 0.93 0.88	0 (無声化)
(8) se ki ni N	% ↑ 141 141 137 139 122 ↑ r. 1.00 1.00 0.97 0.99 0.87	155 162 ↑ 1.00 1.05	(165 167 167 167 167 165 165 167 167 167) 165 162 155 155 ↑ 1.00 1.01 1.01 1.01 1.01 1.00 1.00 1.01 1.01 1.01 1.00 0.98 0.94 0.84	147 141 143 143 143 137 130 0.89 0.85 0.87 0.87 0.83 0.79
(9) su to ko ro	% ↑ 141 141 137 139 122 ↑ r. 1.00 1.00 0.97 0.99 0.87	160 165 162 139 ↑ 1.00 1.03 1.01 0.87	167 167 165 165 155 ↑ 1.00 1.00 0.99 0.99 0.83	(141 152) 149 157 149 147 145 141 139 137 0.84 0.91 0.89 0.94 0.89 0.88 0.87 0.84 0.83 0.82
09 to mo da tji	% ↑ 141 139 139 ↑ r. 1.00 0.99 0.99	(139 139 143 149) 155 147 160 ↑ 1.00 1.00 1.03 1.03 1.00 0.95 1.03	(147 157) 162 152 162 155 152 145 ↑ 1.00 1.07 1.00 0.94 1.00 0.96 0.94 0.80	133 141 141 139 137 124 0.82 0.87 0.87 0.86 0.85 0.77

1.3では東京T氏の4拍語二高アクセント単語の音調動態を、そして表1.4では平板アクセント単語のそれを示す。いずれも、隔波ごとの数値と、その値が各拍のはじめのピッチに対する比の値をr.の項に示す。但し、表1.2に示したと同様にして第4拍に当たる部分は第3拍からの連続として扱った。

“花・かご”のような二拍語連続の場合が4拍語平板アクセント単語と異なる点は、後者が第2、3、4拍とピッチが比較的平らに続くに対し、前者、即ち2拍語連続では、いわば〔低高低低〕のように第2、3拍の間にピッチの段層ができる点である。

さて、物理量として観察される結果としては、“花かご”と“はな・かご”の弁別の特徴は〔カ〕の音調動態の相違であるというのが結論である。そのことを無視して〔カ〕の強さに弁別の特徴を求めるわけにはいかない。なぜなら、〔ハナカゴ°〕の〔カ〕を特に強く発音し、〔ハナ・カゴ°〕の〔カ〕を弱く発音しても両者の“きこえ”が反対になることはないからである。〔ハナカゴ°〕であることの条件は〔カ〕の強さにあるのではなく、〔カ〕の下降音調にある。(ややていねいな発音の場合第3拍は必ずしも下降音調にならない場合もありその時は第2拍より相当低く、第4拍が更に低いという特徴がある。)

〔ハナ・カゴ〕の〔カ〕の“強さ”については、あるいは東大音科学研究施設での実験⁷⁾のような生理学的方法では、あるいは声門筋の動きから強さの要素を認められるかもしれない。然しそれと音の“聞こえ”とは別であろうという立場を筆者はとる。但し、

単語連続の後の第1拍を強いと聞くとすれば、あるいはそれを、ピッチが急に変わるために起こる強さの感覚として、(BolingerのA Theory of Pitch Accent in English⁸⁾が多くの実験資料をもって説明した) 捉える必要があるかもしれない。

2. “コレガ” (低高高)

2.2……〔コ〕が一番強いのか

東京方言において、コレガ(之が)は「低高高」であるけれども、第1音節が一番強いであろうか。強調された発話ではそういう傾向があるが、“これが花かご?”等と言う時、常に〔コ〕が強いというわけではない。

プロミネンスの問題と分けるために、東京平板3拍語の発音について説明する。次の第3章以後の問題とかわるので特に3拍語のうち、東京では平板アクセント、大阪でも平板アクセント(高高高)の単語を選んで、各拍の振幅の大きい部分を測って表にした。前述のように“強さ”の考え方は確定的なものでなく、母音の量として面積を見る立場もあるから参考のため持続時間の資料も添えて表にしたその一部が表2.1である。東京T氏と大阪A氏のものである。(この二人は年令、ことばの早さ、ピッチ等が比較的似ている。)

平板3拍語(NHKアナウンス語本所載3拍語中、東京大阪とも平板アクセントのものは18単語であるが無声母音を持つもの2つを

表2.1 3拍語東京大阪平板アクセントの単語、(a)振幅と(b)持続時間第1拍をそれぞれ1.00とした場合の各拍の値

		東京(平板) T氏				大阪(平板) A氏				東京(平板) T氏			大阪(平板) A氏				
		①	②	③		①	②	③		①	②	③	①	②	③		
1) あきま	a.	1.00	2.23	3.38	a.	1.00	0.93	1.73	9) こども	a.	1.00	1.39	1.56	a.	1.00	1.04	0.89
	d.	1.00	0.83	2.25	d.	1.00	0.88	1.71		d.	1.00	2.00	3.10	d.	1.00	1.85	2.46
2) あたい	a.	1.00	3.27	2.82	a.	1.00	1.56	0.67	10) たばこ	a.	1.00	1.86	3.29	a.	1.00	1.30	1.09
	d.	1.00	2.55	2.91	d.	1.00	2.19	1.69		d.	1.00	2.00	2.45	d.	1.00	1.81	1.56
3) あられ	a.	1.00	1.77	1.85	a.	1.00	1.50	0.92	11) いなか	a.	1.00	1.91	3.55	a.	1.00	1.86	1.71
	d.	1.00	1.94	2.06	d.	1.00	2.53	2.40		d.	1.00	2.38	3.88	d.	1.00	1.86	2.00
4) いかり	a.	1.00	2.11	1.58	a.	1.00	2.25	1.17	12) ほくろ	a.	1.00	4.29	6.86	a.	1.00	0.78	1.83
	d.	1.00	2.07	2.29	d.	1.00	3.00	3.18		d.	1.00	2.29	5.57	d.	1.00	0.71	2.24
5) いもの	a.	1.00	1.50	1.14	a.	1.00	2.13	1.40	13) みなと	a.	1.00	1.65	2.35	a.	1.00	1.28	1.39
	d.	1.00	1.64	2.36	d.	1.00	2.31	2.38		d.	1.00	3.67	5.17	d.	1.00	1.79	1.64
6) うつわ	a.	1.00	2.67	6.17	a.	1.00	1.40	2.07	14) ほとけ	a.	1.00	4.00	4.08	a.	1.00	1.62	1.05
	d.	1.00	1.75	4.75	d.	1.00	0.95	1.65		d.	1.00	2.83	5.50	d.	1.00	3.00	3.00
7) ぎんざ	a.	1.00	2.50	5.50	a.	1.00	0.87	1.13	15) となり	a.	1.00	1.82	1.05	a.	1.00	1.13	0.65
	d.	1.00	2.91	3.64	d.	1.00	1.48	1.71		d.	1.00	4.50	4.13	d.	1.00	2.92	2.23
8) けむり	a.	1.00	1.23	0.85	a.	1.00	0.92	0.52	16) わらい	a.	1.00	1.16	0.76	a.	1.00	1.03	0.50
	d.	1.00	1.86	2.21	d.	1.00	0.86	1.36		d.	1.00	1.52	0.69	d.	1.00	1.52	1.62

省いた他の16箇について扱う。表に示す平均値は次の通りである。振幅も持続時間も第1拍のそれを1とした場合の2、3拍の値と、その最大(max.)、最小(min.)を示す。

表 2.2 東京T氏 (n=16)		大阪A氏 (n=16)	
(振幅)	1 : 2.14 : 2.81	1 : 1.35 : 1.15	
{min	*1.10	{0.85	{min 0.78★
{max	4.29☆	{6.86☆	{max 2.25
{1.87			
(持続時間)	1 : 2.31 : 3.19	1 : 1.91 : 2.03	
{min	0.81	{0.72	{min 0.71★
{max	4.28	{5.33	{max 3.23
{3.11			

*印 min 1.10 の値は、東京T氏の場合、コ「レガと同じ平板3拍語の第1拍が第2拍より振幅の大きいものがないことを示している。

参考までに表 2.1の中大阪東京で、振幅の大そう異なる語を次に示す。〔hotoke〕(仏)、〔hokuro〕(黒子)である。

表 2.3	東京T氏	大阪A氏
〔ほとけ〕		〔ほとけ〕
(振幅)	1 : 4.00 : 4.08	1 : 1.62 : 1.05
(持続時間)	1 : 2.78 : 5.30	1 : 3.04 : 3.04
〔ほくろ〕		〔ほくろ〕
(振幅)	1 : 4.29☆ : 6.86☆	1 : 0.78★ : 1.87
(持続時間)	1 : 2.21 : 5.33	1 : 0.71★ : 2.20

☆印東京の〔ほくろ〕第2、3拍の振幅は、max. (最大) の値であるに対し、★印大阪の値は min. (最小) のそれである。両者の発音のし方の相違を示唆している。(表 2.2と比較されたい。)

なお、他の東京2人大阪1人の発音で同様の資料の平均値を次に示す。(第1拍を1とした場合の第2拍の振幅の値を示すもので、①、②は第1拍第2拍を示すものとする。(①>② (n=1) 等の記述は、第1拍の方が第2拍より振幅の大きいものの数は1箇の意)

表 2.4 東京Ts氏 (n=16)	大阪Y氏 (n=16)
① ②	① ②
(振幅) 1 : 1.62	1 : 1.09
{min. 0.89(①>② n=1)	{min 0.66(①>② n=8)
{max. 2.45	{max 1.81(①<② n=8)
東京N氏 (n=17)	
① ②	
1 : 1.59	
{min. 1.03(①>② n=0)	
{max. 3.08	

これらの資料は、特に東京の場合、第1拍が第2拍より“強く”ないことを示している。振幅の大きさは母音の種類による。a>e>o>u>iであった。

東京平板の場合は低高高であり大阪の場合は高高高であるから、これらは同じアクセントとは言えない。そこでアクセントの全く同

じもの、例えば二高アクセントのものでは振幅、持続時間がどうであるか調べた結果は次の通りである。次の単語はいずれも二高アクセント、即ち低高低の場合である。

表 2.5	東京 T 氏 (n = 8)	大阪 A 氏 (n = 8)
(振幅)	1 : 2.71 : 2.03	1 : 1.97 : 1.28
(持続時間)	1 : 1.76 : 2.24	1 : 1.90 : 1.98

表2.5の振幅を表2.2即ち平板アクセントの場合と比べると、後者では東京 1 : 2.14 : 2.81、大阪 1 : 1.35 : 1.15であったからいずれも、2高アクセントの方が第2拍の振幅が第1拍の振幅に比べて大きいことがわかる。

他のインフォーマントの二高アクセントの場合第1拍、第2拍の振幅の比を次に示す。

表 2.6	東京 Ts 氏 (n = 8)	大阪 Y 氏 (n = 16)
	① ②	① ②
(振幅)	1 : 2.06	1 : 1.42
	{min. 1.50 max. 3.33}	{min. 1.00 max. 2.73}

東京 N 氏 (n = 8)

① ②

1 : 1.77

{min. 0.78 (①>② n = 1) [ofime]
max. 3.38

(因に福島市のインフォーマントの資料をのせよう。福島では3拍単語の場合殆んどが2高アクセントに発音する。)

福島 S 氏 (n = 16)

① ②

(振幅) 1 : 1.55

{min 1.20
max 3.13}

以上の資料からは、3拍語の東京平板アクセントの場合、(二高アクセントよりも、第1拍、2拍の振幅の差は少ないが) とりわけ第1拍が強いという根拠はなさそうである。他の方言と比べても東京の方が、第2拍が強いという方が当たっている。

第1拍から第2拍へのピッチの変化が東京平板アクセントの場合(2高アクセントほどではないが)あるから、強いて言えば、“はな・かご”の〔な〕から〔か〕への(“低”への)ピッチの差と同じように、“コレガ”の〔コ〕から〔レ〕への変化が、“コ”(低)にアクセントを感じさせるか、あるいは強調した場合の“コレガ”の印象かと思われる。

“東京方言のコレガ(之が)は「低高高」であるけれども第1音節が一番強いという特徴があり”(p. 62 参照)という記述は、冒頭に引用した“日本語一般に、アクセント素の頭の部分すなわち第1モーラの部分がやや強く発音されかつはっきり調音される傾向がある。”を具体例で説明しているが、実際には、筆者がすでに「おそ下り考」⁹⁾の中で述べたように、第1拍にアクセントのある場合

できども、第1拍が弱く、第2拍のはじめの方が第1拍よりピッチも高いという例が、日本語のむざむざな発音の中には見出される。

いずれにしても

“高低アクセント素においてはその頭が強いとして記述される”
には疑問が残る。

3. 京阪方言、“底の”（高高高）と“其処の”（低低高）

3.1……前者のソコは高く弱く、後者のソコは低く強いのか

“京阪の方言において、

{ $\overline{ソコ}$ }（底の）…… $\overline{ソコ}$ は高くやや弱く、
{ $\overline{ソコ}$ }（その）…… $\overline{ソコ}$ は低くやや強い。”

上記の記述は、次の理由で説明された。

“これは高低の対立を対等に保つためである。”そして、

{高と強}……“「高」のきこえが「低」のそれより著しく良くなり
{低と弱}……均衡が破れる。”

それゆえ、上記の場合は

{ $\overline{ソコ}$ }……「高」と「弱」}
{ $\overline{ソコ}$ }……「低」と「強」}である。

（但し、 $\overline{ソコ}$ の $\overline{ソ}$ のように）“核より後の低が弱く発音されるのは、ここには高低の音韻的対立がないからで、この点よりみても「核」という名称はふさわしい。”……とこう

なっている。（p. 62 参照）

さて、 $\overline{ソコ}$ （底の）の $\overline{ソコ}$ と、 $\overline{ソコ}$ （其処の）の $\overline{ソコ}$ とが、高低の対立である、そこまでは事実であるが、なぜ、強弱の対立を加える必要があるのかよくわからない。（勿論これが氏の“アクセント素”の説明に必要であり、“核”の名称の裏づけになるわけであるが）

京都2人、大阪2人のインフォーマントによる“底の、其処の”の発話では、 $\overline{ソコ}$ と $\overline{ソコ}$ になる。それで、“底が、其処が”に変えて発音してもらった。その一部を図3.1に示す。4人のうち1人も $\overline{ソコ}$ の $\overline{ソコ}$ を $\overline{ソコ}$ より“強く”発音しているものがない。 $\overline{ソコ}$ も $\overline{ソコ}$ も、強さは変わらぬものと、 $\overline{ソコ}$ の $\overline{コ}$ が弱く発音されるものと二種である。

$\overline{ソコ}$ の $\overline{ソコ}$ が、高で弱ということは、

“「高」のきこえが「低」のそれより著しく良くなり均衡が破れる。”

ことを防ぐためらしいが、もしそうならば、冒頭の

“日本語一般に、アクセント素の頭の部分すなわち第1モーラの部分がやや強く発音されかつはっきり調音される傾向”

とのかかわりあいはどうなるか。もしこの通りならば、 $\overline{ソコ}$ の $\overline{ソコ}$ も、 $\overline{ソコ}$ の $\overline{ソコ}$ も第1拍強く従って「強弱」の関係になるはずではなからうか。

次に、大阪方言の三拍語平板と尾高アクセントの単語について、その振幅と持続時間を表3.1に、音調動態を平板は表3.2に、尾高

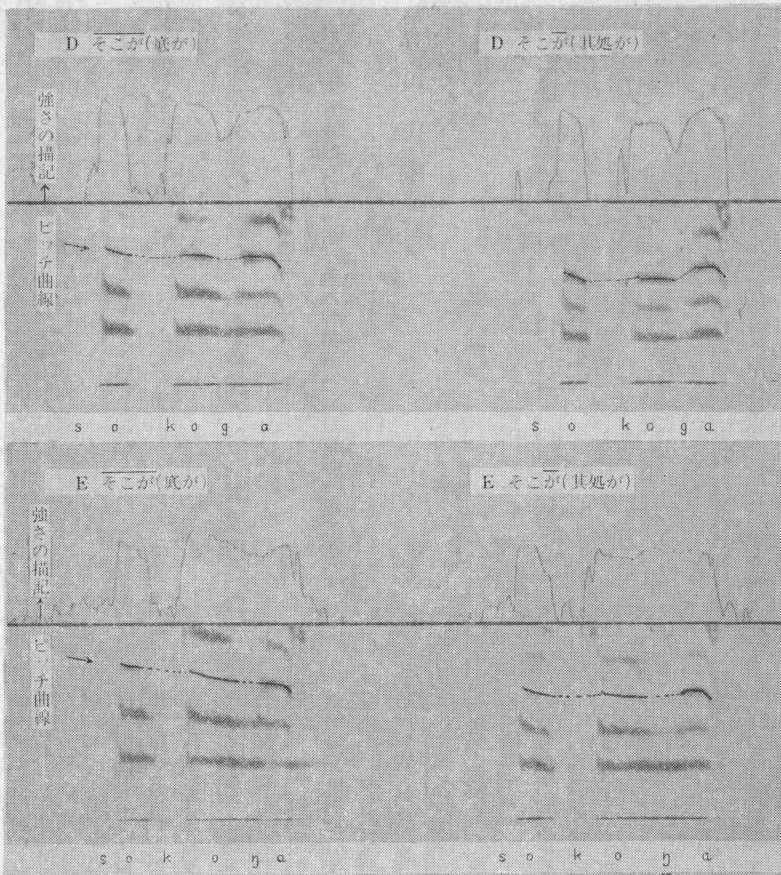


図3.1 京都方言「ソコガ」と「ソコガ」(Dさん(上)、とEさん(下)による)

表3.1 3拍語大阪、平板・尾高アクセント単語各拍の(a)
振幅と(d)持続時間

		大阪(平板)					大阪(尾高)		
		①	②	③			①	②	③
1) あきま	a. 1.00 d. 1.00	0.93 0.88	1.73 1.71	1) あちら	a. 1.00 d. 1.00	1.00 0.60	1.93 1.65		
2) あたい	a. 1.00 d. 1.00	1.56 2.19	0.67 1.69	2) いさん	a. 1.00 d. 1.00	3.57 2.31	1.29 1.31		
3) あられ	a. 1.00 d. 1.00	1.50 2.53	0.92 2.40	3) からす	a. 1.00 d. 1.00	1.21 1.88	0.68 1.69		
4) いかり	a. 1.00 d. 1.00	2.25 3.00	1.17 3.18	4) おせじ	a. 1.00 d. 1.00	2.27 2.75	1.00 2.08		
5) いもの	a. 1.00 d. 1.00	2.13 2.31	1.40 2.38	5) とかい	a. 1.00 d. 1.00	1.53 1.81	1.33 1.81		
6) うつわ	a. 1.00 d. 1.00	1.40 0.95	2.07 1.65	6) しまり	a. 1.00 d. 1.00	1.67 4.00	1.33 3.33		
7) ぎんぎ	a. 1.00 d. 1.00	0.87 1.48	1.13 1.71	7) むかし	a. 1.00 d. 1.00	2.29 1.53	1.43 1.40		
8) けむり	a. 1.00 d. 1.00	0.92 0.86	0.52 1.36	8) おやこ	a. 1.00 d. 1.00	1.67 1.60	2.00 1.80		
9) こども	a. 1.00 d. 1.00	1.39 2.00	1.56 3.10	9) つよみ	a. 1.00 d. 1.00	0.74 0.65	0.65 1.12		
10) たばこ	a. 1.00 d. 1.00	1.86 2.00	3.29 2.45	10) つらさ	a. 1.00 d. 1.00	1.90 5.83	2.50 5.83		

は表3.3にのせる。

〇〇〇型においてその持つ特徴は、ピッチ変化の問題であって、振幅はむしろ、第3拍が大になる傾向があるから、〇〇〇型と〇〇〇型の相違点を、その第1、2拍の、“高くて弱い”のと“低くて強い”のとの相違として捉えることは適当とは思われない。

また、例えば、“底の厚い箱”(ソコノ)では、“ソコ”は弱いのが、“そこ(其処)が熱い”で、“ソコ”が強まるという発音ならば、後者は驚き又は強調をあらわし、一方気楽に言う時は〔ソコ〕は弱くなる。こうした発話の場によるイントネーションと区別してそれぞれ別に資料を整える必要がある。

4. 京都方言、“桜が咲く”(高高高高高高)

4.1……{サクラガ}{サク}二つのアクセント素としての“強さや調音上の特徴”があるか

“亀山方言(京都も同様のようだ)の”“サクラガサク(桜が咲く)は「高高高高高高」だから、高さの点(殊に調素)にばかり注意していると途中に何の切れ目もないが”

“強さや調音上の特徴に注意すると”

“{「サクラガ」}{「サク」}のように二つのアクセント素を有する”と(p.62参照)

“認められる”であろうか疑問である。

別の箇所でもこうも述べられる。

表 3.2 大阪平板アクセント単語の音調動態 (%は、隔波ごとのピッチを、r. の項は、矢印で示すピッチを1.00とした場合の後続のピッチの値を示す。第3拍は第2拍からの連続として比の値を出した。)

	第 1 拍	第 2 拍 ()内は子音	第 3 拍
(1) a ki ma	♯ ↑ 167 167 189 192 167 ↑ r. 1.00 1.00 1.13 1.15 1.00	↑ 213 204 208 208 208 204 ↑ 1.00 0.96 0.98 0.98 0.98 0.96	(200 196 196 196 192 196) 200 196 196 196 196 192 189 185 182 (165 0.94 0.92 0.92 0.92 0.90 0.92 0.94 0.92 0.92 0.92 0.90 0.89 0.87 0.85 (0.77)
(2) a ta i	♯ ↑ 192 192 189 189 167 ↑ r. 1.00 1.00 0.98 0.98 0.87	↑ 208 200 196 196 176 182 170 182 189 189 172 170 ↑ 1.00 0.96 0.94 0.94 0.85 0.88 0.82 0.88 0.91 0.91 0.83 0.82	167 165 167 167 165 165 149 (114 0.80 0.79 0.80 0.80 0.79 0.79 0.72 (0.55)
(3) a ra re	♯ ↑ 189 185 179 182 ↑ r. 1.00 0.98 0.95 0.96	(200 189) 200 208 196 196 196 196 196 192 192 189 172 182 143 ↑ 1.00 0.95 1.00 1.04 0.98 0.98 0.98 0.98 0.96 0.95 0.86 0.91 0.72	(149 192) 170 176 170 172 170 162 165 0.75 0.96 0.85 0.88 0.85 0.86 0.85 0.81 0.83
(4) i ka ri	♯ ↑ 200 192 167 ↑ r. 1.00 0.96 0.84	↑ 228 213 204 200 200 195 196 192 192 ↑ 1.00 0.93 0.89 0.88 0.88 0.88 0.86 0.86 0.84 0.84	(167) 192 189 189 192 192 189 192 179 170 162 170 0.73 0.84 0.83 0.83 0.84 0.84 0.83 0.84 0.79 0.75 0.71 0.75
(5) i mo no	♯ ↑ 204 196 189 179 182 ↑ r. 1.00 0.96 0.93 0.88 0.89	(192 196 200 200 196) 200 204 204 200 196 192 196 196 192 189 ↑ 1.00 1.02 1.04 1.04 1.02 1.00 1.02 1.02 1.00 0.98 0.96 0.98 0.98 0.96 0.95	(204 196 196) 196 192 196 185 189 192 185 179 160 162 1.02 0.98 0.98 0.98 0.69 0.98 0.93 0.95 0.96 0.93 0.90 0.80 0.81
(6) u tsu wa	♯ ↑ 192 192 189 182 170 167 ↑ r. 1.00 1.00 0.98 0.95 0.89 0.87	↑ 200 196 200 200 200 200 ↑ 1.00 0.98 1.00 1.00 1.00 1.00	(200 200 196) 192 189 189 182 172 170 170 167 160 189 1.00 1.00 0.98 0.96 0.95 0.95 0.91 0.86 0.85 0.85 0.84 0.86 0.95
(7) gi n za	♯ ↑ (167 147 152 155 162) 182 179 196 200 200 200 200 ↑ r. 1.00 0.88 0.91 0.93 0.97 1.00 0.98 1.03 1.10 1.10 1.10 1.10	(204 204 200 200 200 196 196 196 196 192 179) ↑ 1.00 1.00 0.98 0.98 0.98 0.96 0.96 0.96 0.94 0.88	(179 170 170) 172 189 185 182 172 170 167 167 162 0.88 0.83 0.83 0.84 0.93 0.91 0.89 0.84 0.83 0.82 0.82 0.79
(8) ke mu ri	♯ ↑ 208 200 204 200 200 200 ↑ r. 1.00 0.96 0.98 0.96 ♡ ♡	(200 200 204 200 204) 208 200 196 196 189 182 ↑ 1.00 1.00 1.02 1.00 1.02 1.00 0.96 0.94 0.94 0.91 0.88	(200 179 192) 170 185 189 179 172 167 (152 0.96 0.86 0.92 0.82 0.89 0.91 0.86 0.83 0.80 (0.73)
(9) ko do mo	♯ ↑ 213 204 200 196 ↑ r. 1.00 0.96 0.94 0.92	(200 200) 204 200 200 200 200 196 196 ↑ 1.00 1.00 1.00 0.98 0.98 0.98 0.98 0.96 0.96	(200 192 196 192 189 196) 200 196 196 182 196 179 176 170 0.98 0.94 0.96 0.94 0.93 0.96 0.98 0.96 0.96 0.89 0.96 0.88 0.86 0.83
00 ta ba ko	♯ ↑ 200 196 196 200 200 196 ↑ r. 1.00 0.98 0.98 1.00 1.00 0.98	(192 189 192) 200 200 200 200 196 196 196 192 189 189 167 ↑ 1.00 0.98 1.00 1.00 1.00 1.00 0.98 0.98 0.98 0.96 0.95 0.95 0.84	192 170 172 170 167 139 (125 0.96 0.85 0.86 0.85 0.84 0.70 (0.63)

表 3.3 大阪尾高アクセント単語の音調動態 (表 3.2 の r. の終り、太字の部分とこの表のそことを比べて見る。)

		第 1 拍	第 2 拍	第 3 拍
(1) a ti ra	% ↑ ↓	145 162 165 165 133	179 189 179 170	(182) 192 192 176 172 192 185 189 176 170 (143)
	r.	1.00 1.12 1.14 1.14 0.92	1.00 1.06 1.00 0.95	1.02 1.07 1.07 0.98 0.96 1.07 1.03 1.06 0.98 0.95 (0.80)
(2) i sa n	% ↑ ↓	167 155 160 145	200 192 176 172 172 172 179 172 172 185 192	176 189 189 192 170 170
	r.	1.00 0.93 0.96 0.87	1.00 0.96 0.88 0.86 0.86 0.86 0.90 0.86 0.86 0.93 0.96	0.88 0.95 0.95 0.96 0.85 0.85
(3) ka ra su	% ↑ ↓	167 165 165 162 128	(160 157) 167 165 167 167 165 160 165 155	172 172 170 170 167
	r.	1.00 0.99 0.99 0.97 0.77	1.00 0.98 1.00 0.99 1.00 1.00 0.99 0.96 0.99 0.93	1.03 1.03 1.02 1.02 1.00
(4) o se dsi	% ↑ ↓	167 167 165 141	196 176 189 182 172 179 170 172 167 165 167	(167 167 172) 172 179 189 182 189 182 172
	r.	1.00 1.00 0.99 0.84	1.00 0.90 0.96 0.93 0.88 0.91 0.87 0.88 0.85 0.84 0.85	0.85 0.85 0.88 0.88 0.91 0.96 0.93 0.96 0.93 0.88
(5) to ka i	% ↑ ↓	143 141 135	162 165 165 167 165 167 167	172 176 176 176 176 172 172 162
	r.	1.00 0.99 0.94	1.00 1.02 1.02 1.03 1.02 1.03 1.03	1.06 1.09 1.09 1.09 1.09 1.06 1.06 1.00
(6) fi ma ri	% ↑ ↓	185 182	(182 170 172 172 182) 189 189 182 189 182 182 182 189 170 170	(167 172) 185 192 200 196 200 200 196 189 170
	r.	1.00 0.98	1.00 0.93 0.95 0.95 1.00 1.00 1.00 0.96 1.00 0.96 0.96 0.96 1.00 0.96 0.96	0.88 0.91 0.98 1.02 1.06 1.04 1.06 1.06 1.04 1.00 0.90
(7) mu ka fi	% ↑ ↓	(128 122) 149 143 139 125	155 145 152 149 143 141	165 165 162 157 143
	r.	1.00 0.95 1.00 0.96 0.93 0.84	1.00 0.94 0.98 0.96 0.92 0.91	1.06 1.06 1.05 1.01 0.92
(8) o ja ko	% ↑ ↓	165 162 149 157	(165 165 167) 167 165 170 167 170 167 152	170 172 172 182 189 182 182 170
	r.	1.00 0.98 0.90 0.95	1.00 1.00 1.01 1.00 0.99 1.02	1.02 1.03 1.03 1.09 1.13 1.09 1.09 1.02
(9) tu jo mi	% ↑ ↓	165 165 167 167 176 167 167	(167 167 167) 172 167 167 167 167	(165 170 170 176 182) 172 176 192 176 176 189 172 167
	r.	1.00 1.00 1.01 1.01 1.01 1.01 1.01	1.00 1.00 1.00 1.00 0.97 0.97 0.97 0.97	0.96 0.99 0.99 1.02 1.06 1.00 1.02 1.12 1.02 1.02 1.10 1.00 0.98
(10) tu ra sa	% ↑ ↓	165 139	(147 149) 165 167 162 155 155 160 162 162 152	179 172 172 170 167 167 172 167 165
	r.	1.00 0.84	1.00 1.01 1.00 1.01 0.98 0.94 0.94 0.97 0.98 0.98 0.92	1.08 1.04 1.04 1.03 1.01 1.01 1.04 1.01 1.00

“たとえば、亀山方言の¹⁰ サクラガサクは最初のサが強くて次第に(僅かではあるが)弱まり第2のサで再びやや強くなる”¹⁰⁾
上記の文では、“亀山方言(京都も同様のようだ)”のことわり書きがあるが、これが、第1章の〔はな・かご〕の〔か〕、第2章の〔コレガ〕の〔コ〕を含めて

“日本語一般に、アクセント素の頭の部分すなわち第1モーラの部分がやや強く”

の記述につながる。とすると、第3章の〔ソコノ〕も、ソコヲワル(底を割る)「高高高高」においてこれが、{「ソコヲ」{「ワル」}である説明には、“最初の”ソ“が強くて次第に(僅かではあるが)弱まり”ワ,,で再びやや強く”ならねばならなくなる。そうすると、第3章に述べた〔ソコフ〕の〔ソコ〕が低く強くそれと“均衡を保つために”〔ソコフ〕の〔ソコ〕は高く弱くの説明に矛盾を生じることになりそうである。

一方、〔エダガカレル〕(枝がかれる)、〔ユカヲハル〕(床を張る)、〔ヒマガデキル〕(暇ができる)、〔ミズヲクム〕(水を汲む)等においては、第1拍はいずれも第2拍より弱いのがふつうであり、後に続く動詞も〔kareru〕〔haru〕などでは第1拍が“強い”のは、必ずしも“切れ目”であるからでなく。母音が〔a〕で第2拍が〔a〕でないゆえであり、切れ目がなくても京都発音者の〔arigatasa〕(有難さ)「高高高高」の〔sa〕は“強い。”

図4.1には、京都出身者DさんEさんの“桜が咲く、のスペクトログラムをのせる。いわゆる文節の切れ目、動詞の第1拍にあたる

母音の強さの描記の部分¹¹⁾を矢印で示す。強さの描記で、文節の切れ目を見分けることはできない。(3)“ありがたさ”の“さ”は(2)“さくらがさく”の後の“さ”よりむしろ強いくらいである。

図4.2では“さくらがちる”“こどもがいる”“うつわをわる”(いずれも平板アクセント)をのせる。強さの描記矢印の部分をごらんいただきたい。

図4.3(10)“あたいがたかい”は、〔a〕の多い文で、しかも文節の切れ目にアクセントのあるものをえらんでのせた。この区切りも、強さで判断ができない。

図4.4では“こどものもの”と“いたずらもの”“考えもの”をのせる。前二者は、“子供の・もの”で意味上の区切りがあり、後者は複合語の場合である。意味上の区切りが、物理量としての弁別の特徴を示しているとは思われない。

(但し亀山方言についてはまだ資料を持たない。服部氏が“京都方言も同様のようだ”とされた京都方言について述べた。)

5. む す び

5.1 ……一語としてのまとまりが一定の物理量としてあらわれるとは思われない

“はなかご”と“はな・かご”との弁別の特徴は、第1章に述べられるように第3拍及び第4拍の音調動態にある。又、東京方言の、“コレガ”の類は、必ずしも第一拍が高いとは限らない。

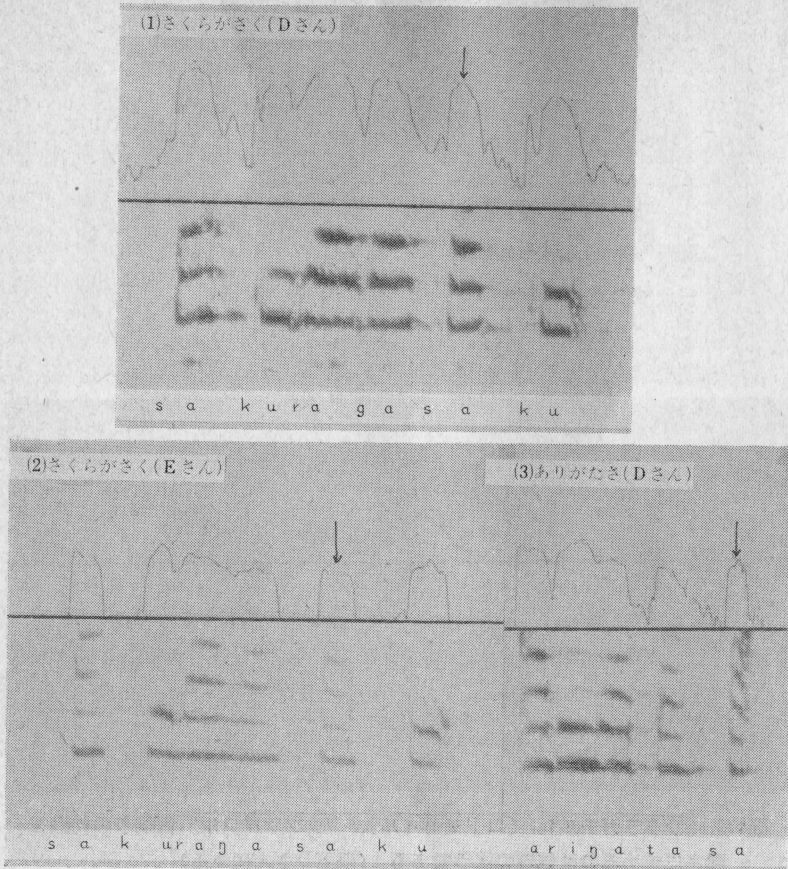


図4.1 「サクラガサク」の二つの「サ」は強いとも限らない、「アリガタサ」の「サ」と比べる。

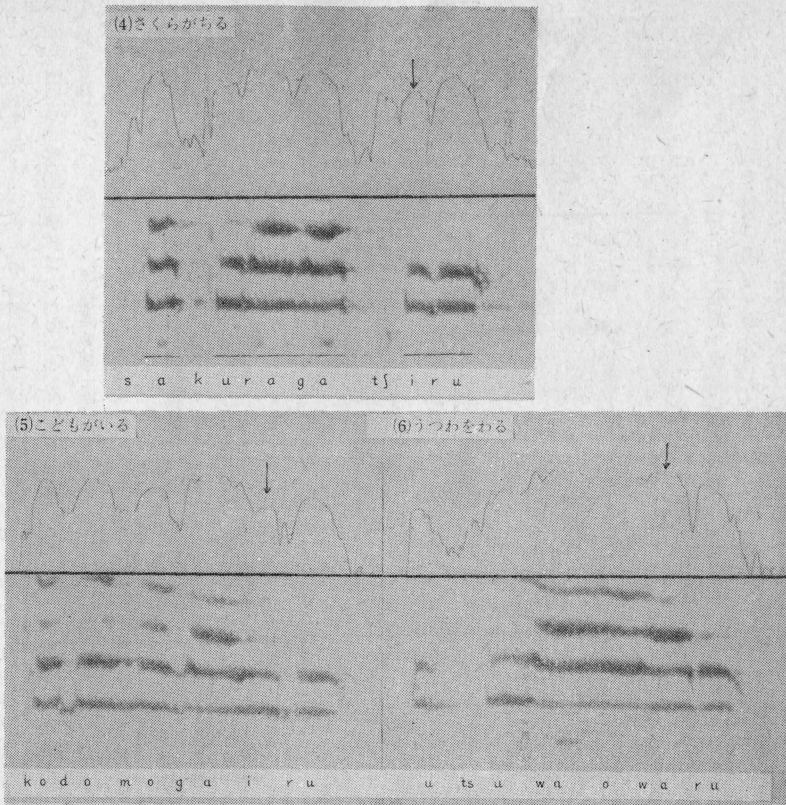


図4.2 「サクラガチル」、「コドモガイル」、「ウツワラワル」 区切りの特徴を強さに求めるのは無理のようである。(以下Dさんによる)

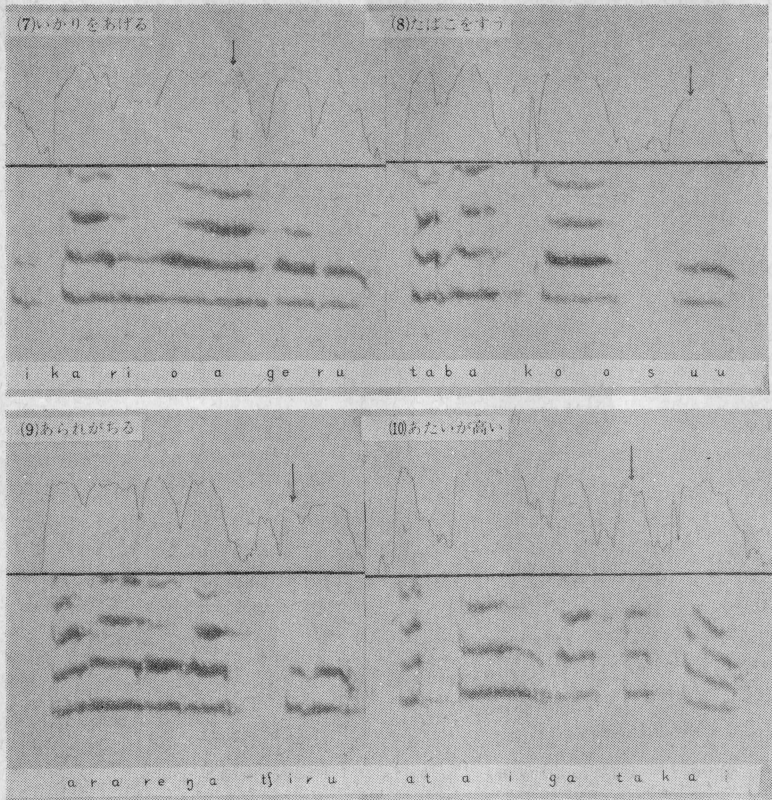


図4.3 「イカリヲアゲル」「タバコヲスウ」「アラレガチル」の場合と「アタイガタカイ」の場合も強さの特徴はつかめない。

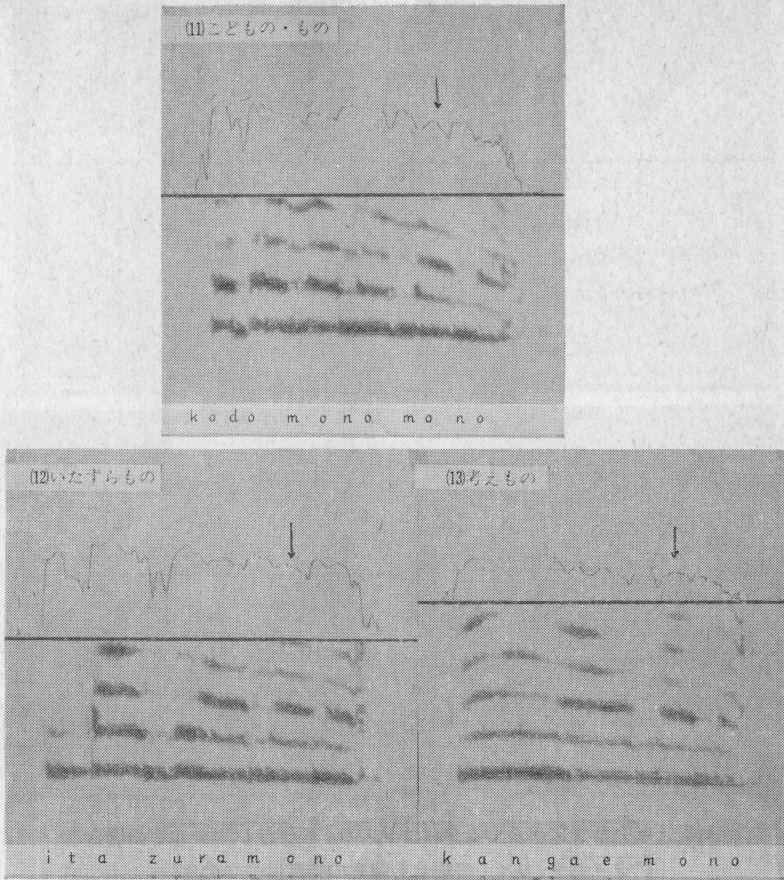


図4.4 「コドモノモノ」を「イタズラモノ」「カンガエモノ」と比べても弁別的特徴は見出せない

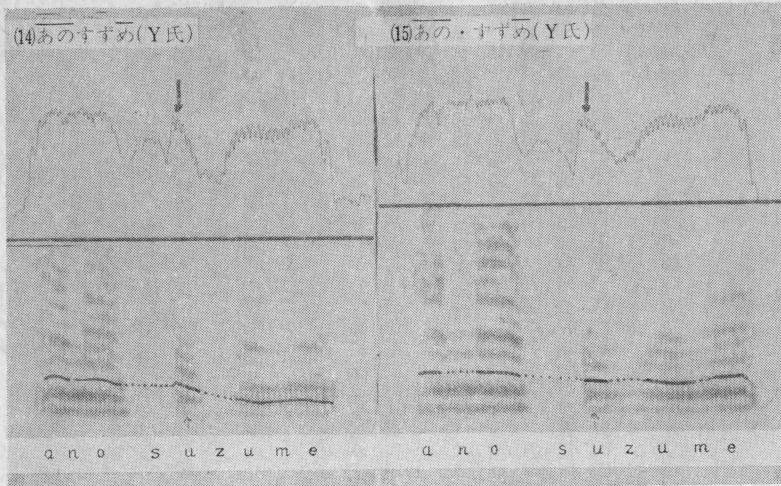


図5.1(14) $\overline{\text{ア}}\overline{\text{ノ}}\overline{\text{スズメ}}$ は、連続発音、(15)は $\overline{\text{ア}}\overline{\text{ノ}} \cdot \overline{\text{スズメ}}$ 、 $\overline{\text{ス}}$ の音調動態に相違あり、この場合強さはむしろ区切った方が弱い。

一方、京阪方言、 $\overline{\text{ソコノ}}$ （底の）と $\overline{\text{ソコフ}}$ （其処の）の相違は、ピッチの相違であり、ピッチの低い〔ソコ〕は、服部氏の指摘されるように“強い”という特徴を合わせ持つとは限らない。

又、例えば、 $[\overline{\text{コノスズメ}}]$ において“この雀”と早口に続けて発話したものは、〔ス〕が下降動態を示し、“この・雀”とほんのわずかに区切って発音されたものは、〔ス〕が平ら動態を示す。(ii) (図5.1) 強さはむしろ区切った発音の〔ス〕が弱い。

これらのことは、語の区切りが必ずしも強さという要素で解決されないことを示していると思われる。

京阪方言〔サクラガサク〕も、はじめの〔サ〕が強く、〔サク〕のサが再び強くなるとされるが、意味上の連続と区切りとを示す弁別の特徴を強さというような一定の物理量だけに見ようとすることに無理があるようである。

日本語発話の、区切りの後、はじめの拍に力の入るような“感じ”は、更に統辞論的な角度から、又、様々の発話の“場”も考慮に入れて相当数の資料をもとに論じらるべきものと思われる。それではじめて、服部博士の“強さや調音上の特徴にまで注意して、それらの諸特徴を総合的に説明”³⁾しようとする意図が達せられるであろう。それらが“アクセント素”を肯定する結論になるかどうか疑問であり、あらためて論じられねばならないと思われる。

- (1) 服部四郎、言語学の方法、1960、p. 364.
- (2) 同上、 p. 362~3.
- (3) 同上、 p. 365.
- (4) 同上、 p. 363~4.
- (5) 同上、 p. 365.
- (6) R. Weitzman, Word Accent in Japanese, 1971、p. 74~
- (7) M. Sawashima, Devoicing of vowels, 東大音声科学研究施設、1972.
- (8) D.L. Bolinger, A Theory of Pitch Accent in English, Word '58 v. 14、1958.
- (9) 筆者、おそ下り考、大阪樟蔭女子大学論集、1972.
- (10) 服部四郎、言語学の方法、p. 366.
- (ii) 筆者、“はなかご”と“はな・かご”——音節連続と切れ目の一考察、音声学会報 1973予定